

地域語によるバーバルコミュニケーションを支援する 聞き取り独習アプリとその評価

後藤 雅弥[†] 塩盛 舞[†] 寺田 縁[†] 徳永 志保[†] 大庭 理恵子[‡] 馬場 良二[§] 飯村 伊智郎[†]

[†] 熊本県立大学総合管理学部 [‡] 熊本大学多言語文化総合教育センター [§] 湖東カレッジ

1 はじめに

地域語（方言）を多用する地域では、標準語とその地域の方言が混じり合った地域共通語が用いられている。方言多用地域である熊本市在住の外国人を対象とした日常生活での方言に接する程度に関する先行調査 [1] では、「方言に接することが多く、熊本での生活には熊本方言は必要なものだ」という認識がある。」と指摘している。日本語をある程度学習した外国人が方言多用地域でまず感じる困難は、地域共通語話者の発話が聞き取れない点にある。バーバルコミュニケーションの成立には、何より、相手が何を言っているのかを聞き取る能力が必要である。聞き取ることさえできれば、それに対する応答は共通語でも構わない。方言を聞き取れるようになるには、その音声的特徴や標準語と異なる文法形式、語彙を整理し、繰り返し聞くことが重要である。そこで本研究では、方言多用地域である熊本県熊本市で話されている地域共通語に慣れ、聞き取る力を身につけるためのアプリ「聞いてみらんね おもさん¹！ 熊本弁²」を開発した。本稿では、開発したアプリの概要とその評価結果について述べる。

2 方言多用地域での方言学習教材の需要

2016年の吉里らの先行研究 [1] では、熊本市在住の外国人（126名）を対象に、日常生活でどの程度方言に接触しているかを調査している。本調査では、55.6%が「方言で話しかけられる」、52.4%が「方言は共通語より難しい」、56.9%が「熊本方言を勉強したい」と回答している。

また、筆者らの熊本市在住外国人留学生（76名）を対象に今年実施した調査では、88.2%が「普段の生活の中で方言によって困ったことがある」、92.1%が「方言が理解できるようになりたい」と回答している。「方言

A Listening Comprehension Self-Study App to Support Verbal Communication Using a Local Language and Its Evaluation

Masaya GOTO[†], Mai SHIOMORI[†], Enishi TERADA[†], Shiho TOKUNAGA[†], Rieko OHBA[‡], Ryoji BABA[§] and Ichiro IIMURA[†]

[†] Faculty of Administrative Studies, Pref. Univ. of Kumamoto

[‡] Center for International Education, Kumamoto Univ.

[§] Japanese Educational Lab., Coto College

¹ “おもさん”は、「たくさん」を意味する熊本方言 [2] である。

² App Store 及び Google Play から無料でダウンロードできる。

で困ったのはどのような時か」という質問に対しては、回答の82.1%が「アルバイトの時」であり、「方言をなぜ理解できるようになりたいか」という質問に対しては、「アルバイトで役に立つから」という回答が全体の62.5%であった。さらには、57.9%の留学生が「これまでに方言学習の機会がなかった」と回答している。

以上のことから、熊本方言の学習の機会は多くなく、その学習のための教材が求められていると考えられる。

3 開発したアプリの概要

開発したアプリ教材は、(1) 熊本方言 [2] 特有の音声（はつおん）、語彙（ことば）、文法（ぶんぼう）を学ぶ知識編である「はじめて」、(2) 学ぶ内容（音声、語彙、文法）ごとに会話を聞き、問題に答える演習編である「カテゴリ」、そして(3) 難易度ごとに会話を聞き、問題に答える演習編である「レベル」で構成される。表1は、これらのうちの演習編「レベル」に関する教材構成である。

知識編である「はじめて」は、「はつおん、ことば、ぶんぼう」の3つのカテゴリから成る。「はつおん」では、「あるもん → あつもん」「それが → そつが」のように熊本方言でよくみられる音変化の規則と会話例を提示する。「ことば」では、「あん（あの）や「そぎゃん」（そのような）のような熊本方言特有の指示詞や接続詞、相槌などを取り上げ、会話文を提示し、問題に解答する形式とした。「ぶんぼう」では、「～ば（～を）や「いっちゃん」（全然）などの方言形式の意味（標準語訳）、会話例を提示する。また、アプリ利用者が耳にした方言の意味や使い方を容易に検索して確認し、会話例を聞くことができるように、各項目はリスト形式で提示している。これにより、熊本方言に馴染みのない利用者も、基本的な熊本方言を学ぶことができる。

演習編である「カテゴリ」は、会話文を聞いて即時応答、課題理解などの問題に解答するものである。会話文は「はつおん、ことば、ぶんぼう」といったカテゴリで分類し、利用者はそれぞれのカテゴリを選択し問題に解答することができる。1つの会話文に「はつおん」と「ぶんぼう」のように複数のカテゴリ要素が含まれる場合には、「はつおん」カテゴリにも「ぶんぼう」カテゴリにも会話文を紐付け、どちらを選択しても出題されるように設定している。同じく演習編である「レ

表 1: 演習編「レベル」の教材構成

難易度	問題数	方言要素例	会話例
かんたん	17	どこさん(どこへ) ～しよっと?(～してるの?)	ハナさん: こんにちは。いいお天気ですね。 めぐみさん: ああ、こんにちは。どこさん行きよっと? (ああ、こんにちは。どこへ行くの?)
レベル (演習編)	18	～けん(～から) ～ば(～を) さるく(散歩する)	男性: 時間があるけん、この辺ばちよっと一緒にさるかんね。 (時間があるから、この辺をちよっと一緒に散歩しませんか。) ハナさん: いいですね。
むずかしい	23	だっが(だれが) こがん(こんな) ～ば(～を) しよる(している) ～けん(～から) しよがなかもん(したくてもできない)	男性: だっがこがんゴミの出し方ばしよるかわからんけん、注意のしよがなかもんね。 (だれがこんなゴミの出し方をしているのかわからないから、注意したくてもできないよね。)

ベル」は、「カテゴリ」と同様に会話文を聞いて即時応答、課題理解などの問題に解答するものである。ここでは、表 1 に示す通り、会話文に出現する方言要素の多さによって「かんたん、ふつう、むずかしい」の3つのレベルを設定した。利用者は自身の熊本方言の理解度に応じてレベルを選択し、解答することができる。

演習編における問題の提示画面には、「会話文を聞く」「会話文を見る」「問題文を聞く」「問題文を見る」という4つのボタンを配置した。利用者はまず会話文を聞き、会話文を文字で確認する。その後、その会話文に対する問題文を聞き、問題文を文字で確認しつつ解答する。解答後は正誤判定が行われ、利用者はそこで標準語訳による解説を確認できる。問題はランダムに5問出題され、全5問の解答が終了すると正答数を確認できる。

会話文は、外国人が、友だち、会社や近所の人、市役所の人等と話す場面を想定して作成した。外国人は標準語、それ以外は熊本方言交じりの地域共通語で話している。スピーチスタイルは、場面に応じて、フォーマルまたはカジュアルを使い分けている。問題文の読み上げは標準語で行った。スマホなどの画面に表示される漢字には、すべてにルビを振っている。

なお、本アプリの仕様は、筆者らの研究グループが想定した学習行動が利用者(外国人など)によって実践されるかを確かめる試用調査[3]をもとに決定した。

4 開発したアプリの評価実験

熊本市在住の外国人留学生(76名)を被験者として本アプリを利用してもらい、利用後にアンケートに回答してもらった形で、主観的な評価のための実験を行った。

まず、アプリが使いやすかったかについて1を最小値、5を最大値とし、5点満点で評価をしてもらった。平均点は約3.56点であり、最頻値は最大値の5点で全体の36.8%であった。また、「アプリの良かった点はどこか」という問いに対しては、「熊本方言の聞き取り練習ができる」という回答が最も多く、全体の67.1%であった。その他には「会話文や問題文を見て確認できること」「クイズができること」などの回答がアプリの良い点として多く挙げられた。

次に、「このアプリを使用して、熊本方言についての理解が深まったか」という問いには、92.1%が「深まっ

た」と回答している。具体的にどのようなことを理解したかの問いには、「熊本方言の使い方」という回答が全体の65.8%であり最多であった。また、「このアプリはどのような場面で役に立つと思うか」という問いには、全体の68.4%が「熊本方言を学習したい時」と回答した。

さらに、「今後もこのアプリを利用したいか」という問いには、89.5%の被験者が「利用したい」と回答した。その理由としては、「熊本方言をもっと調べたいから」「もっと練習したいから」「毎日の生活で使える言葉があるから」「いろいろな会話を聞きたいから」などの肯定的な意見が多数挙げられた。

一方で、「アプリのデザインで困ったことはあったか」という問いに対し56.6%が「困ったことがあった」と回答している。「具体的にどのような点で困ったか」という問いに対しては全体の53.3%が「ボタンの意味がわかりにくかった」と回答した。このことから、アプリの試用版[3]の問題であった「アプリの使用方法のわかりにくさ」という点においては、今後も改善の余地があることが明らかになった。

5 おわりに

地域語によるバーバルコミュニケーションを支援する聞き取り独習アプリについて述べ、その特徴や課題を明らかにした。今後は明らかになった課題を改善し、現在不足している方言学習の機会創出に繋げたい。

謝辞 本研究はJSPS 科研費15H03218の助成を受けたものである。

参考文献

- [1] 吉里さち子, 和田礼子: 熊本市における在住外国人の方言使用の実態 — 方言聞き取り教材作成に向けて —, 2016 日本語教育学会第1回地区研究集會予稿集, pp. 34–35 (2016).
- [2] 秋山正次: 熊本県の方言, 講座方言学9 —九州地方の方言—, pp. 207–223, 国書刊行会 (1983).
- [3] 馬場良二, 和田礼子, 大庭理恵子, 田川恭識, 吉里さち子, 嵐洋子, 國澤里美, 石山友之: 地域語によるコミュニケーションを支援する聞き取り学習システムの開発, 2019 年度日本語教育学会春季大会予稿集, pp. 341–345 (2019).